

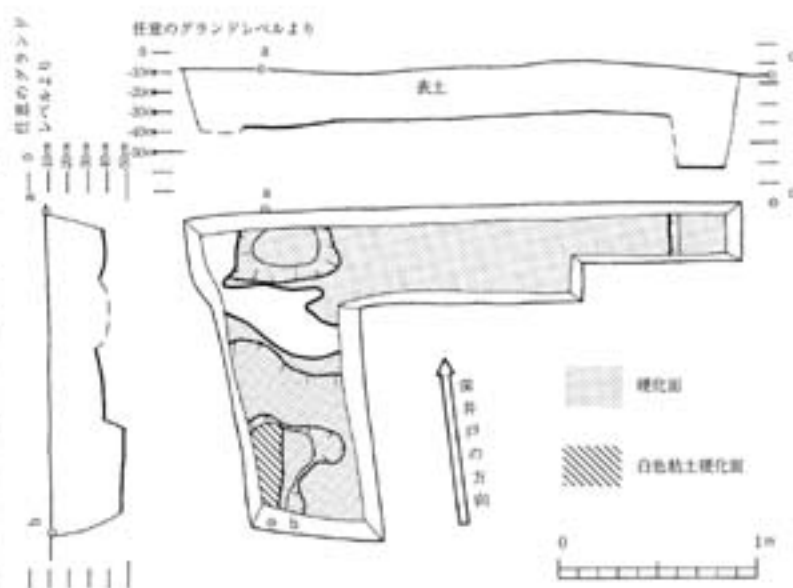
易品となる羊の一行が列を成して歩いている背後に、連続した窪みが見える。窪みの芯々距離は羊の大きさよりも狭いことから、70cm前後が想定される。重なりながらも数条見られることから、位置を少しずつ変えながら永年使用されたことが考えられる。本場なら、現地へ出かけて調査すべきであるのだが、今のところそれもかなわない。取材スタッフに手紙で詳しいことを尋ねたのだが、返事はなかった。この連続した窪みが日本における波板状凹凸面と同一のものであるかの断定は類例を増やすしかないが、筆者は同一のものである可能性が高いと考える。



第5図 映像でみられた連続する窪み

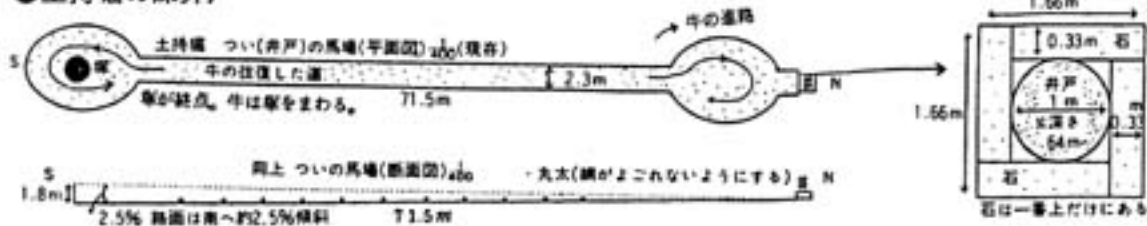
(4) 深井戸の牛歩行程

牛馬が頻繁に歩いた場所として、前回は奄美大島の砂糖垂りを紹介したが、鹿児島県内では深井戸から水を汲み上げる際にも牛が活躍したことが知られている。鹿児島県本土の大部分の台地はシラス（始良・丹沢火山灰、A. T.）であり、台地上での水の確保は切実な課題であった。特に大隅半島の笠野原台地では、50mを越す深さの井戸が寛政年間（1789～1800年）に掘られ、中には牛や馬に綱を引かせて水を汲み上げる方法がとられた場所もあった。綱を曳く牛馬が往復する道を「ツイノババ（つるべの馬場）」と呼び、土持堀・垂水堀・花岡堀の三ヶ所が知られている。その内土持堀の深井戸が県指定文化財に指定されており、垂水堀の馬場は現在道路になっ



第6図 串良町花岡堀の試掘調査

●土持堀の深井戸



第7図 串良町土持堀の深井戸（『かごしま文化財事典』より転載）

ている。串良町花岡堀の深井戸の馬場の一部は、竹林になっているものの浅い窪みとなって現在も地表面から観察できる。

平成14年10月30日に久留主力氏宅菜園の一部を試掘させていただいた。表土下30cmに硬化した面が検出でき、牛が歩いた当時の面が明らかとなった。硬化面が5cmほど窪んだ部分が70cmほど離れて検出できた。中間部分には硬化面が見られず、ピンボールを差し込んでも確認できなかった。下図のように綱が汚れないようにするための丸太が埋め込まれていた可能性もある。白色の粘土が硬化した部分と硬化面からさらに25cm深い部分にも硬化面が出てきた点については、今回の試掘では明らかにできなかった。試掘した地点は井戸からだいぶ離れた場所で、牛が回転する範囲に相当するということが、久留主氏の話と硬化面の広がりから想定される。試掘した範囲では明確な連続した窪みは確認できなかったが、馬場の中央付近を調査する機会があれば、何らかの成果が得られると考える。